

教養の歴史におけるレトリック・ヒューマニズム的伝統の意義

加藤守通（東北大学）

はじめに

時代区分

1. レトリック的教養の創設（プロタゴラス、ゴルギアス、イソクラテス、アリストテレス）
2. レトリック的伝統のローマ文化とキリスト教への移入（キケロ、クインティリアヌス、アウグスティヌス）
3. 中世：自由学芸の一環としてのレトリック、学問における討論の重要性
4. ルネサンスにおけるヒューマニズムの確立（ペトラルカ、レオナルド・ブルーニ、ヴァッラ、エラスムス、メランヒトン）
5. 17世紀以降：デカルトに代表される学問の興隆のなかで、レトリックは哲学と対抗するだけの力を失い、二次的なものになる。（例外：ヴィーコ）
6. 新人文主義：ヘルダー、フンボルト
7. ニーチェ以降

I RH 的伝統の三つの特徴

1 公共性

エレア哲学（パルメニデス）：「存在」を認識する特権的な知者とドクサの領域に生きる愚かな大衆の対比、貴族的、Pathos der Distanz（ニーチェ）

プロタゴラス：「万物の尺度は人間である」（人間尺度論）の「人間」とは「君」や「ぼく」というような各人である。真理は、万人の共有財産になる→民主主義との関連

キケロ：「余暇において、機知とたいへん学識ある会話よりも快く、また humanitas にふさわしいものがあるでしょうか。実際、われわれは、互いに話し合い、話すことによって考えを表現できるという点で、野獣に勝っているのです」（*De oratore*, I, 32）。

「市民ヒューマニズム」：15世紀前半のフィレンツェにて開花。Coluccio Salutati(1331-1406),とLeonardo Bruni(1370-1444)は、ペトラルカのヒューマニズムの精神を継承すると同時に、フィレンツェの書記官長として政治的にも活躍した。「観想的な」思索家としてのキケロ像（中世）の変換。

「この戦いの後で、ダンテは家に帰り、以前にもまして学問に専心したが、だからといって洗練された市民的会話をなござりにしなかった。彼が、不断の勉学にもかかわらず、快活な親しさと青年らしい会話のお蔭で、自分が勉学に携わっているという印象を誰にも与えなかったということは、驚嘆に値する。このことに関して、私は、多くの無知な人たちの誤謬を非難しなければならない。彼らは、孤独と閑暇に身を隠す人たち以外は誰も学者でないと思っているが、私は、会話から遠ざかったこれらの偽君子たちの誰一人として三文字を知っている人に出会ったことがない」（Leonardo Bruni Aretino.

Humanistisch-philosophische Schriften mit einer Chronologie seiner Werke und Briefe, hrsg. von Hans Baron, Leipzig/Berlin, 1928, p. 53)。

2 言語

パルメニデスは、有為転変する現象世界とは異なった不変不動の唯一の存在の存在を説き、思惟と言語をこの存在に結び付けた。プラトンにおいて言語はアイデアを対象とした^{インテンショナル}志向的な連関の中に置かれた。

アリストテレス『命題論』1：「ところで音声のうちにある様態は靈魂のうちにある様態の象徴であり、書かれたものは音声のうちにある様態の象徴である。そして文字がすべての人々にとって同一ではないように、また音声も同一ではない。けれども、それら二つのものがそのしるしであるところの最初のもの、すなわち靈魂の様態はすべての人々にとって同一である。そしてこの様態がそれらの類似物であるところの事物はもちろん同一である」(山本光雄訳)。「鏡としての言語観」

アリストテレスの『弁論術』における言語理解：話し手(エートス)、聞き手(パトス)、対象の3要素

ソフィストにおける「薬としての言語」

キケロにおけるストア哲学批判の人間形成論的意味

ペトラルカ：「まだ少年のころ、〔…〕私はキケロの書物に夢中でした。〔…〕むろんあの年頃では、私はなんら内容を理解することはできませんでした。私はただ、ことばの甘美さ、ひびきのよさに、すっかり魅了されていたのです。そして、キケロ以外の作家のものを讀んだり聞いたりしても、なにかしら生気がなく、ひどく不調和なものに思われました(『老年書簡集』XVI、1；近藤恒一訳)」。

「たとえば、文体の点から偽書を見ぬいたり作者をつきとめたりするには、それまで中世知識人の知らなかった新しい作品観や鑑賞態度が必要であった。作品を永遠不変の真理の受肉とみなして、ただ意味内容の点から見ていくのではなく、作品を作者の人格の受肉として、そこに作者の精神のリズムをも感じとる態度や能力が絶対に必要なのである。」(近藤恒一『ペトラルカ研究』、創文社、1984年、p. 27)

ブルーニ・アロンソ論争

「実際、理性は、異なった言語によって表現されるとはいっても、あらゆる国家に共通なのです。したがって、われわれが論じるのは、〔翻訳が〕ラテン語を受け入れ、適切に書かれ、事柄自体に合致しているかということであって、ギリシャ語と一致していることではないのです。〔…〕なぜならば、アリストテレス自身権威から理性を獲得したのではなく、理性から権威を獲得したのですから。理性に一致するものはすべて、アリストテレスが言ったことだと考えるべきであり、われわれの翻訳者が賢明なしかたで言い表したものはすべて、ギリシャ語でも書かれていたとみなされるべきなのです」Birkenmajer, A. "Der Streit des Alonso von Cartagena mit Leonardo Bruni Aretino", in *Vermischte Untersuchungen zur Geschichte der mittelalterlichen Philosophie*, XX, 5, Münster

(1922), p. 166)。

3 知

プロタゴラス：「身内のことについてはもっとも良く自分の家を治める道をはかり、ポリスのことについては、これを行うにも論ずるにも、もっとも有能かつ有力な者となるような熟慮」(『プロタゴラス』318E-319A)

Jorg Kube, *TEXNH und APETH. Sophistisches und platonisches Tugendwissen*, Berlin, 1969.

マルティパースペクティヴィズムとしての知

①反エレア哲学、②「人間尺度論」との整合性、③民主主義との関連

II レトリック・ヒューマニズム的教養の現代的意味

III RH 的伝統と現代思想

Samuel Ijsseling, *Rhetoric and Philosophy in Conflict. An Historical Survey*, The Hague, 1976

ニーチェ

①『善悪の彼岸』28：「一つの言語を他の言語に翻訳するのにもっとも難しいのはその文体の速調である。文体のテンポ^{ランボ}というものはその民族の性格のなかに、生理学的に言えばその民族の＜新陳代謝＞の平均的速度のなかに、根拠をもつものである。忠実にくわだてられた翻訳だというのに、知らぬまに原文の格調を汚してしまったものとして、ほとんど偽作といってもいいようなものもある。それもひとえに、事柄や言語における危険なもの一切を跳び越え乗り越えてゆく原文の雄渾な快速調が、翻訳されなかったためである。

〔…〕だが、レッシングのごとき人物の散文をもってしてさえも、ドイツ語がマキアヴェリ^{マキアヴェリ}の速調を模倣するなど、できたことだろうか」(信太正三訳)。

②『この人を見よ』：「病者の光学からして自分のよりはもっと健康な概念と価値とを見渡し、今度は逆に、豊かな生の充実と自身とからデカダンス本能のひそかな営みを見下ろすこと — この修行に私は一番長く年季をかけたし、私に何か本当の意味の経験があったと言えるとするならば、まさにこの道においてだ。今では私はこの技術をすっかりものにしている。物の見方を換えるということはお手のものだ。おそらく私にだけ『価値の価値転換』などということが可能なのはそもそもなぜなのか、その第一の理由はここにある」(川原栄峰訳)。

③『権力への意志』481：「現象に立ちどまって、『あるものはただ事実のみ』と主張する実証主義に反対して、私は言うであろう。否、まさしく事実なるものはなく、あるのはただ解釈のみと。私たちはいかなる事実『自体』をも確かめることはできない。おそらく、そのようなことを欲するのは背理であろう。〔…〕『遠近法主義』。世界を解釈するもの、それは私たちの欲求である」(原佑訳)。

ガダマー

Wo nun das Reden Kunst ist, da ist es auch das Verstehen. Alle Rede und aller Texte sind also grundsätzlich auf die Kunst des Verstehens, die Hermeneutik, verwiesen, und so erklärt sich die Zusammengehörigkeit von Rhetorik (die ein Teilbereich der Ästhetik ist) und Hermeneutik: *Jeder Akt des Verstehens ist nach Schleiermacher Umkehrung eines Aktes des Redens, die Nachkonstruktion einer Konstruktion. Die Hermeneutik ist entsprechend eine Art Umkehrung zur Rhetorik und Poetik.* (「シュライアーマッヒャーにとって理解のあらゆる行為は、発話の行為を転倒させたものであり、構築されたものをもう一度構築しなおすことであった。それゆえに、解釈学とは、修辞学と詩学のある種の転倒なのである」) (Wahrheit und Methode, pp. 178f.) (斜線は加藤による)

ハイデガーは、『存在と時間』の Befindlichkeit に関する章のなかで、パトスに関する最初の体系化された考察が、心理学ではなく、アリストテレスの『弁論術』第2巻で行われていることを指摘している。そしてレトリックを単なる学問の一分野と捉えるのではなく、「相互存在の日常性の最初の体系的な解釈学」と捉える見解を提示している (Sein und Zeit, p. 138. この箇所は、岡本英明『解釈学的教育学』p. 36 にて引用されている)。

参考文献 (本発表におけるプロタゴラス、キケロ、ブルーニに関する部分は以下の拙論に基づいている)

1. 「『弁論家論』におけるキケロの理想の弁論家像」、東北大学教育学部『研究年報』第38集 (1990年)、13-29頁
2. 「パルメニデス・プロタゴラス・ソクラテス - 古代ギリシャにおける三つの教師像 -」、『教育哲学研究』第65号 (1992年)、1-5頁
3. 「レオナルド・ブルーニとキケロ - 教養論を巡って -」、『イタリア学会誌』第42号 (1992年)、56-79頁
4. 「レオナルド・ブルーニの言語観 - アロンソ・ガルシア・デ・カルタヘナとの論争をめぐる -」、『ルネサンス研究』第1号 (1994年)、68-93頁
5. 「プロタゴラスの教育思想」、東北大学教育学部『研究年報』第43集 (1995年)、1-14頁
6. 「レオナルド・ブルーニ教養書簡集」(共訳)、『ルネサンス研究』第2号 (1995年)、97-167頁
7. 『教養の復権』(共著)、東信堂、1996年、77-112頁 (第2章「教養のレトリック・ヒューマニズム的伝統と今日の課題」)
8. 「プロタゴラスと民主主義」、『東北哲学会年報』第15号 (1999年)、1-13頁